

その 27

背嚢に 2 冊

「万葉集」文庫本



父母我 等能々志利弊乃 母々余具佐 母々与伊豆麻勢 和我伎多流麻豆

「父母が 殿の後(しりへ)の ももよ草 百代(ももよ)いでませ 我(わ)が来(きた)るまで」

(父母のお住いの裏庭のももよ草の百代もお達者でいなされや、おれが帰って来る日まで)

相模國佐野郡の防人生壬部足国(いくたまへのたりくに)(巻 20・4326)

「日めくり万葉集」を担当するにあたって、直接会って是非話を聞きたい大物がいたことは先に書いた。1 人は、哲学者の梅原猛氏。そしてもう 1 人が、作家の阿川弘之氏だった。かつて特攻隊の記録や資料を調べた中で、阿川氏の代表作の 1 つとされる『雲の墓標』を読み、その中に万葉集に触れたところがあったことをおぼろげながら覚えていたからだ。現役時代は会うことはかなわなかったが、「日めくり万葉集」の語り手、檀ふみさんが「阿川のおじさま」と呼んで親しくされていることは知っていた。そこで、檀さんに早速紹介してもらったところ、「檀さんと万葉集のためなら」ということで、まさに 2 つ返事で出演を快諾してもらった。放送日は、2008 年の秋と決まり、そのためインタビューは 8 月、猛暑日となった夏の真っ盛り、世田谷文学館の館長室で行った。カメラをセットし音声テストをしたところ、マイクを部屋のどこに移しても、最大限に上げているクーラーの音が話の邪魔になる。そこで、阿川氏にはお詫びした上で、クーラーを切った本番となった。インタビューが始まってしばらくすると、聞き手の私や撮影スタッフも汗みどろ、誰より大変だったのは阿川氏だったはずだが、吹き出す汗を拭おうともせず、涼しい顔をして、何より、心を込めて、2 つの歌について語ってくれた。まるで亡き人を偲んで、追悼するかのよう……。その内の 1 首が、冒頭の「ももよ草」の歌だった。

これまで、何回かにわたって、万葉集の中の「海行かば」や「醜の御楯」など忠君愛国の歌が、戦時中学徒出陣や玉砕の軍歌として、或いは軍国教育の道具として使われたという事実を書いてきた。戦争が、万葉集を負の遺産としてしまったことはなんともつらいことだった。今もなお、悲慘な戦争を思い出させるとして、万葉集を手にしたくないという人がいることも確かだ。

しかし、同じ戦争の時代、「万葉集は心の支えだった」、「万葉集のおかげで心が慰められた」という声を、何人かの「日めくり万葉集」の選者の方々から聞くことができた。その1人が、阿川氏だった。

昭和19（1944）年の夏、海軍に入隊した阿川氏は、「支那方面艦隊司令部附」の海軍中尉として中国上海に赴任することになり、福岡の雁ノ巣飛行場から飛び立つことになった。

その時のことから、阿川氏は語り始めた。

「福岡まで車で行く途中、郷里の広島を通るので、1晩だけ両親に別れを告げに家に寄ったんです。その時、自分も2度と帰って来られないかもしれないけれど、両親が果たしていつまで元気に暮らしていられるだろうか、そのことが重く心にひっかかりまして、それで思い出したのがこの歌です。

『ももよ草』がなんであるかについては諸説あり、菊だとか露草だとか、はっきりしないようですが、『殿の後の』というのを自分の家の庭と考えれば、そこに毎年咲き続ける草花のように、両親が長く元気でいてくれたらという自分の気持ちを代弁してくれている歌のような印象があったのでしょ」。

そして、万葉集に初めて出会った時の思い出を、昨日のこのように話してくれた。

「万葉集は、旧広島高等学校1年の時、第1巻から講義を受けました。先生は中島光風というアララギ派の歌人で、先生の講義は、驚くほどフレッシュな感じがして、中学を出たばかりの僕たちの心にしみました。中島先生のお宅に伺っては仲間たちと嘴の黄色い万葉論を戦わせたものです。その時のテキストがこれです」と言って、擦り切れてボロボロになった2冊の文庫本を手にとって見せてくれた。

「上海に赴任した時、この昭和13年刊の新潮社の『作者別万葉集』文庫本の上・下巻を背囊に入れて、戦争中肌身離さず大切に持っていました。敗戦後帰った家は原爆で焼け、すべての蔵書を失ってしまいましたが、これは戦地に持って行ったおかげで助かって、残ったのはこの文庫本2冊だけ。今でも自分の書棚の隅に置いています。もう70年以上持ち続けていることになりましたね」。

阿川氏は、中国で通信の任務に当たっていたため、両親が住む広島に「新型の特殊爆弾が落とされた」ことは、その翌日知った。

「相当大きな被害があったこと、放射能のため75年間は生物の生存が不可能になるだろうというようなことも耳にしましたから、これはもはや『殿の後のももよ草』どころではなく、父も母も生きているはずがないと思っていました。自分は生きて日本の土を踏めたとしても、もう帰る場所はなくなつたんだと覚悟しました。家は丸



焼けて灰となっていました。幸い両親は無事でした。その意味でも、これは、僕のはかない思いを託するにふさわしい歌でした」。

万葉集の講義を受けた旧制広島高等学校の中島教授は被爆により亡くなっていた。阿川氏はその後、最初の長編である自伝的小説『春の城』を執筆。その中で、中島教授は「矢代先生」として登場するが、それにはあの原爆の日、市内上流川町の自宅で被爆、外出中だった夫人を探し求めて焼け跡をさまよい、ついに原爆症に倒れる痛ましい姿が描かれている。

それから、阿川氏は、万葉集 4516 首の中で、最も好きな歌が 1 首あると言って、そらんじてくれたのが、次の歌だった。

「もののふの 八十（やそ） 娘子（をとめ）らが 汲みまがふ 寺井の上の 堅香子（かたかご）の花」
大伴家持（巻 19・4143）

「堅香子の花」とは、カタクリの花のことで、万葉集の中でただ 1 首、カタクリを詠んだ歌である。

「万葉集の中ではこの歌が一番好きです。というのは、昭和 17（1942）年に大学を繰り上げ卒業して海軍に入り台湾で厳しい訓練を受けている時、広島高等学校時代の中島先生門下の仲間で、同期の親友の大浜巖比古（いつひこ）が、どこで見つけたのか、カタクリの花の絵葉書に、『こんなものが君の慰めになれば幸い』と添え書きして送ってくれた思い出の歌だからです。その彼も 2 年遅れて海軍に入ってくるのですが、この歌が、厳しい訓練の間の慰めになりました。

『もののふの 八十娘子らが 汲みまがふ』というのは、大勢の若く美しく艶々した娘たちが、入れ違いに水を汲みながら、いろいろなお喋りをしているんでしょね。そんな光景がありありと浮かんでくるところが好きです。この親友の大浜は、戦後万葉学者になりました」。



この堅香子の花の歌は、万葉故地高岡市の伏木小学校の第 2 校歌として歌われていたが、それが市民の間に広がり、市民が集まると皆で斉唱する市民歌となった。平成 7 年には、高岡市の花に指定され、切手の図柄に採用されたこともあったという。



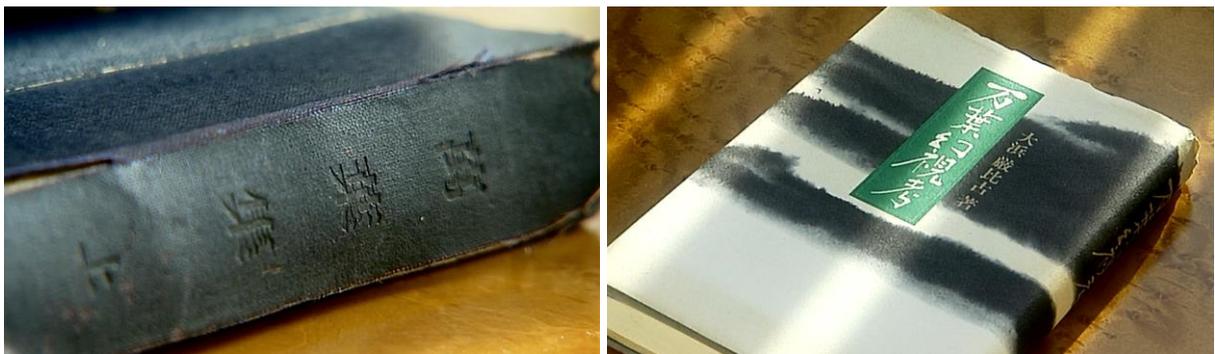
高岡市にある寺井史跡

さて、阿川氏の話の中にあつた、戦後万葉学者になつた同期の親友大浜巖比古氏だが、早くに世を去る。そんな親友からもらった堅香子の絵葉書を思い出して、阿川氏は、友をしのぶ。

「彼から絵葉書をもつた時は、うれしかったですね。56歳の若さで亡くなりましたが、僕と違って何しろ、万葉集には詳しくつた。学問的な視点よりも、むしろ歌人、詩人としての視点からの興味深い論考が、『万葉幻視考』という1冊の著書にまとまっています。大浜の残した唯一の本です」。

もちろん私は、大浜巖比古氏を知るすべはない。阿川氏のインタビューから、その名を始めて聞き知つた。しかし、唯一の著書とされる『万葉幻視考』も、最近まで読む機会がなかつた。そして、この本は、阿川氏の言う「歌人、詩人」ではないが、私こと「プロデューサーの視点」からは、きわめて「興味深い論考」だつた。この唯一の著書は、死後有志の手により、生前の原稿をまとめて出版されたものだが、その中心となつたのが、高岡万葉歴史館の坂本館長だつた。坂本館長は、「大浜万葉の唯一人の弟子」と自称している。とすると、坂本館長を、「唯一人の万葉の師」、とするものとして、私は大浜氏の不肖の孫弟子ということになる。

万葉学者大浜巖比古氏とその著書『万葉幻視考』については、稿を改めて紹介することにしたい。



阿川氏には、その後、1度だけ連絡したことがある。「日めくり万葉集」に出演していただいた文化人の方々に、短い放送時間の中では語りつくせなかつた万葉集への熱き思いをじっくりと語ってもらふ特別講座を、東京青山のNHK文化センターに開設したが、そのゲストとして来てもらえないか、と打診するためだつた。文字通り、「打診」で、すでに90歳を超えていた阿川氏にお願いするのは無理だろうと思つてはいたが、万に一つでもその可能性があるかどうか、感触を探るための電話だつた。ところが、番組出演の時と同じように即答してくれた。「万葉集の話だつたら、いいよ」。ただし、注文が1つ、「最近体調を崩して歩くのに苦労しているので、車を出してくれ」。もとより、そのつもりだつた。講演料は車代だけでほとんどないに等しい講座だつたが、今回も、阿川氏は遠出の労を厭わず快諾してくれた。

しかし、それからしばらくして、「入院するので行けなくなつた」、という連絡をもらうことになる。残念ながら、万葉集ファン、そして、阿川さんファンの受講生が楽しみにしていた特別講座は、ついに実現することはなかつた。

そして、2015年、新聞各紙は、氏の逝去を大きく報じた。享年95。万葉愛に溢れた大作家だつた。

